

地域の情報

創立50周年を迎えた新潟県立高田特別支援学校の記念事業について

本 間 勲*

1 はじめに

昭和43年1月1日、新潟県立高田養護学校（現高田特別支援学校）は、旧高田市立金谷中学校の跡地に新設された。知的障害の児童生徒が通学する学校では、新潟県内2番目の設置校である。

開校時の昭和43年度は、小中学部合わせて60名の児童生徒でスタートした。地元の高田市の他、寄宿舎を有することで、上越地区をはじめとして新潟県内各地から多くの子供が学んでいた。昭和52年には、国立療養所犀潟病院（現独立行政法人国立病院機構さいがた医療センター）内に訪問教育学級が開設された。また、昭和59年度には高等部が設置され、12年間を見通した教育体制が整った。当校は上越地域の特別支援教育の中核として歩みを進め、今年、創立50周年の年を迎えた。

2 創立50周年記念事業の取組

(1) 「結願の像」修復と除幕式（4月）

寄宿舎の前庭に「結願の像」という少女像がある。両手を校舎に向かって差し上げ、子供たちの幸せを願い温かい眼差しで学び舎を見守っている。花崗岩の台座には、学校開設のために尽力した徳山ミサヲの「燃り合えば 母の毛綱は強かりき この子呂の家 かくも建ちけり」の歌が刻まれている。この像は、「米一升運動」により高田養護学校の設置を成し遂げた徳山ミサヲをはじめとする上越地域の婦人会の思いを象徴している。母親たちの、障害のある子供たちの学校が完成したことの喜び、子供たちが学校で学び健やかに成長することの願いなどを込めて設置された。

昭和47年に創立5周年記念として「結願の像」が披露されてから45年。長年の風雪に耐えてきた少女像は、表面の塗装が剥げ、腐食のために膝の部分に穴が開いている状態であった。また、台座の歌の塗料は色褪せ、前庭の芝生は衰退している状況であった。そこで、像の修復、台座のクリーニングと歌の塗装、芝生の養生を行った。

修復後に、像の制作者家族、後援会員、地域住民、白楊会員（旧職員）、児童生徒、PTA、学校職員が参加して、「結願の像」修復除幕式を実施した。ここでは、学校創設に尽力した人々とその取組、少女像に込められた思いについての講話を行い、参加者全員で確かめ合った。

(2) 50匹（年）の鯉のぼり（4月）

「泳げ、50匹の鯉のぼり！」をキャッチフレーズに校舎間にロープを渡し、50匹の鯉を掲揚した。「50周年おめでとう」吹

き流しも登場し、創立50周年を祝う気持ちを表現した。一匹の鯉が学校開設からの1年毎の歩みを、また、春風に乗り勇壮とよく泳ぐ鯉のぼりは夢に向かって生き生きと躍動する子供たちを表した。子供たちは鯉のぼりを見上げ、嬉々として歓声を上げていた。

(3) 創立50周年記念「大運動会」（5月）

運動会を「50周年おめでとう」のコンセプトで実施した。小学部・中学部・高等部それぞれに50周年にちなんだ種目を行うとともに、今後の飛躍を願って風船飛ばしを一斉に行った。「50周年お祝いカレーを作ろう」「高田特別支援学校を作ろう」「創立50周年パレード」など、各学部で工夫を凝らした独創的なパフォーマンスが行われた。

(4) 空撮「50周年おめでとう」（7月）

開校から50年、校地や校舎の状況が大きく変化し、学校周辺の環境も開校当時から随分と異なるものとなっている。学校のシンボルであった白楊樹（ポプラ）は、今は一本も無い。前庭の池も埋め立てられてしまっている。

高等部が開設される前は作業棟であった特別教室棟が高等部の普通教室に変更され、それでも足りずにB棟、C棟と増築を重ねてきた。にら畑は駐車場になり、学校周辺は住宅地となった。平成27年には北陸新幹線が開通し、高等部棟からはその高架橋が見える。

これまで、航空写真は昭和40年代に新築校舎の完成を祝して一度撮ったきりであった。そこで、学校及び周辺の状況の今を記録するために空撮（ドローン）を実施することにした。

(5) 創立50周年記念「ぼぶら祭」（7月）

寄宿舎では、「ぼぶら祭」を年に1度実施している。寄宿舎生や家族、職員が交流して寄宿舎生活を楽しく充実したものにするのが目的である。寄宿舎の各部屋を有効に活用して、様々な種類の体験型ゲームコーナーを行っている。

今年は、創立50周年ということで、お祝い提灯を飾ったりうちわを作ったりした。また、倉庫に眠っていた神輿を登場させた。子供たちは夏祭りの雰囲気を楽しみながら、互いに声を掛け合いゲームに参加して楽しんだ。

(6) 創立50周年記念式典・音楽コンサート・学習発表会（9月）

例年実施している学習発表会に合わせて創立50周年記念式典・音楽コンサートを実施した。第一体育館を式典並びに音楽コンサート会場とし、会場に入れない来場者のために寄宿舎食堂をサテライト会場として用意した。

当日は天候に恵まれ、行政関係者、福祉関係者、地域住民、後援会員、白楊会員、児童生徒、PTA、学校職員等を含め、600名を上回る多くの参加者があった。

* 新潟県立高田特別支援学校

記念式典では、新潟県教育委員会、上越市長、地元選出の国会議員・県議会議員をはじめとして、小・中・高・特別支援の学校関係者、歴代校長など、たくさんの来賓が参列し、児童生徒とともに創立50周年を祝うことができた。

音楽コンサートは、新潟県三条市出身で筑波大学附属視覚特別支援学校の高等部に通っているシンガーソングライターの佐藤ひらりさんをお願いした。子供たちは佐藤ひらりさんに共感し、登場からその姿に見入っていた。歌が始まると、普段は動き回ったり声を上げたりしている子供たちも微動だにせず歌に聴き入っていた。また、一緒に歌を歌う場面では、体を弾ませて楽しさを表しながら歌っていた。会場全体が一体となり、楽しさと温かさに満たされたコンサートであった。

学習発表会も、運動会と同様に「50周年おめでとう」をテーマとして各部で発表を行った。小・中・高の各学部ではダンスや演奏を披露したり、美術作品を紹介したりしながら、それぞれの表し方でお祝いの気持ちを精一杯伝えた。

3 おわりに

創立50周年は、当校が開校に至るまでの道程を確認するとともに、道を切り開いた先人の苦労や努力、多くの人々の支援について改めて認識する機会となった。

今日、障害者権利条約の批准や障害者差別解消法の成立など、開校当時と比べれば障害者を取り巻く環境は、大きく改善された。こと教育界では、特別支援教育が注目を浴び、合理的配慮など個々の児童生徒の教育的なニーズに応えることが必須になった。先人たちが今ここにいたとしたら、どのようなことを語るだろう。

創立50周年の記念事業の一つ一つを経ながら、高田特別支援学校に集った人々は先人への感謝の気持ちを抱き、今日の喜びを噛みしめた。一方で、現在に安住することなく子供たちの未来のために前へ進むことの使命と責任を感じたに違いない。

50周年記念事業の一つとしてWi-Fi環境の整備に取り組むことにした。現在の教育に必要なことを取り入れ未来につなぐためである。高田特別支援学校の歴史と伝統を継承しつつ、将来を見据え、今の時代に即した新たな教育に挑戦していきたいと考えている。